

日英バイリンガルクラスでの学生の学び ～比較日本文化論の授業アンケート調査から～

山田 智久

本稿は小樽商科大学で2017年に開講された日英バイリンガルプログラムである「比較日本文化論」を履修した学生を対象として行ったアンケート調査から、学生が何を学び、またどのような点に困難点を感じていたかを整理し授業改善へと繋げることを狙いとするものである。

1 はじめに

日本国内の高等教育機関における国際化は組織的な構造改革だけではなく授業にも影響を及ぼしている。この動きと連動し、留学生の確保、英語のみで授業を行う科目群の増加などの施策が各機関で推進されている。本稿は、2017年に小樽商科大学で開講された「比較日本文化論」という留学生と日本人学生の日英バイリンガル共修クラスについて取り上げ、授業内容と履修学生へのアンケート調査結果を報告し、本授業の成果と改善点について検討する。

2 先行研究

留学生と日本人学生がともに学ぶ授業形態では信州大学の取り組みが先行している。信州大学では、1993年から「日本事情ゼミナール」という授業を日本語で開講し、日本人学生、留学生、帰国生、外国人子弟などの教育を行ってきている。当該授業の目的は協働作業や討論を通して国籍を超えて問題解決を図る（徳井1998:77）というものであるという。徳井は、当該授業の報告にて、教師は指導者ではなく、ファシリテーターとしての役割や衝突が起きたときに介入するメディエーターの役割を担うことが重要だと述べている。その上で、多文化クラスでの教師の役割が変化していくことにより、学習者の自己開示にも変化が表れることを指摘している。このような日本語だけで留学生と日本人学生の混在クラスを運営する事例は、組織的な流れとして現在まで続いている。例えば、北海道大学では、2013年から多文化交流科目という留学生と日本人学生がともに日本語で学ぶ、問題解決型・プロジェクト型の授業を推進している。この科目群では（1）留学生と日本人学生がともに学ぶ環境の制度的保障、（2）汎用的能力の育成、（3）日本人学生の海外留学奨励・促進の3点が主軸に据えられており、この学習過程を通して大学の国際化にも寄与することが可能だとしている（北海道大学留学生センター2014）。同様の取り組みは、岩崎・池田（2015）、岡田・中村（2016）、島崎（2017）など現在でも盛んに行われている。

留学生と日本人学生の混在クラスを英語のみで運営する事例もある。田崎（2002）は、東京農工大学大学院の「異文化間コミュニケーション」という授業において、英語と日本語を併用する授業を行っている。あくまでも主要言語は英語としつつも翻訳活動というものを取り入れ、留学生と日本人学生とが共同作業を行う時間を設けることでグループ活動が活発になることを報告している。花見（2012）も英語のみで授業運営を行う利点として、日本人学生や非英語圏からの留学生の英語学習意欲が高まることを指摘している。

本稿で取り上げる授業事例は、英語と日本語の併用型授業であるが、類似した授業形態の報告である宮本（2013）は、留学生と日本人学生が混在するクラスにおけるバイリンガル学生の果たす役割について調査を行い、バイリンガル学生への教員の積極的な働きかけがあって初めてクラス全体の参加度が高まることを報告している。すなわち教室運営を放任してはクラス内で規範が醸成されないことを宮本の事例は示唆している。

3 授業概要

本稿で調査対象とする授業は2017年度前期開講の比較日本文化論という授業である。当該授業は留学生を対象とした日本文化に関する講義型授業であったが、本稿の筆者が講師依頼を受けた際には、1) 留学生と日本人学生の混在クラスで双方のコミュニケーションを深める授業運営をしてほしいこと、2) その過程で日本文化についての理解を深めることが望ましいことの2点について依頼を受けた。使用言語については特に指定がなかったため日本語と英語を併用することとして、留学生と日本人学生とでのグループワークを主体とした課題解決型授業とした。

履修者は、正規課程の留学生に加え、短期交換留学生と日本人学生が対象である。履修者上限は20名であったが、開講年次である2015年には130名を超える履修希望があったため履修上限を30名まで拡大した。2017年度の履修者は33名で、その内訳は、留学生が14名、日本人学生が19名であった。

2017年度の授業内容は、留学生と日本人学生からなる混成グループで課題を解決しつつ、それをプレゼンテーションしてもらおう形とした。具体的には、前半と後半で授業内容とグループを分けて、前半が英語で、後半が日本語でプレゼンテーションを行うものとした。グループは、留学生と日本人学生の比率及び学年をできるだけ考慮して教員が6つのグループに分けた。設定した課題は次の通りである。

| | |
|-------------|---|
| 前半 (全6回) | <p>【課題】 ある学生Aさんの就職に関する悩みに感情論ではなく、データをもとにAかBを決め、プレゼンテーションをする。選択肢Aは「NGO勤務／やりたい仕事／勤務地はフィリピン／単年契約／年収6000USドル（昇給無し）」。選択肢Bは「地方銀行一般職／あまりやりたくない仕事／最初の勤務地は東京／終身雇用／初任給210万円（昇給有り）」。Aさんは、某国立大学文化教育学部4年生の学生で旅行が好きで、人の役に立つ仕事をしたいと考えている。大学3年生の時に大学を一年間休学して世界一周の旅へ出ている。</p> <p>【発表の決まり】 発表時間は7分、発表言語は英語。</p> <p>【評価】 下記の項目について5段階のリッカート形式で回答してもらいクラスの点数を集計しグループごとに順位を付ける。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 客観的なデータが入っているか 2) 理由付けは深い分析に基づいているか 3) 発表資料の見やすさ 4) 発表の聞きやすさ（ノンバーバルコミュニケーション含む） |
|-------------|---|

| | |
|-------------|---|
| 後半 (全6回) | <p>【課題】 「大学生の時にやっておくべきもっとも大切なこと」についてプレゼンテーションを行う。</p> <p>【発表の決まり】 発表時間は7分、発表言語は日本語。</p> <p>【評価】 下記の項目について5段階のリッカート形式で回答してもらいクラスの点数を集計しグループごとに順位を付ける。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 提案のおもしろさ 2) 提案の理由付けができているか 3) 提案は将来役立つものか 4) 発表資料の見やすさ 5) 発表の聞きやすさ (ノンバーバルコミュニケーション含む) |
|-------------|---|

課題を遂行する過程で文化比較を体感してもらうことが本授業の最大の目的であるため、前半の課題では、日本人学生の就職活動をトピックとし、その周辺情報として日本の就職活動のこと、年収、昇給、有給、NGOで働くこと、海外で働くこと、治安の比較などを必然的に調べるように構築した。後半は自由度を持たせて個々の意見の衝突から価値観や考え方の違いを体験してもらうことを優先し、アイデアを出し合う形とした。班構成は、留学生と日本人学生の混合グループ5～6名で構成し、使用言語については特に縛りを設けなかった。教員の使用言語は、授業前半は英語を主とし、後半は日本語を主とした。また、田崎（2002）を参考として、教員が説明等を終えた後には必ずグループでの理解確認作業を両言語で行ってもらい相互コミュニケーションの促進を図った。

4 調査概要

調査対象者は、比較日本文化論を履修した学生33名とした。履修学生を対象としてアンケート調査を行った結果、留学生12名、日本人学生19名、計31名からの回答を得られた。アンケートは英語版と日本語版を作成し、回答は日本語でも英語でも可能とし無記名で提出してもらった。留学生か日本人学生かと学年を問う以外の質問項目は、次の通りである。

- 1) この授業を履修した理由は何ですか（複数回答可）
 - 異なる文化に興味があったから
 - 外国人と交流したいから
 - 語学力（日本語／英語）の向上のため
 - 先輩、友人に勧められたから
 - シラバスを見ておもしろそうだったから
 - 単位のため
 - 特に理由はない
 - その他
- 2) この授業で得られたことは何ですか（複数回答可）
 - 異なる文化に触れられた
 - 語学力（英語／日本語）が向上した

プレゼンテーションスキルについて学べた
コミュニケーションスキルについて学べた
グループワークの進め方について学べた
その他

3) この授業で難しかったことは何ですか (複数回答可)

文化の違いによるコミュニケーション
ことばの壁によるコミュニケーション
スケジューリング
グループワークでの自分の役割
スライド作り
その他

4) この授業のように、外国人とともに学ぶ授業形態ではどのような利点・欠点があると思いますか。自由に書いてください。

本調査の目的は、学生が何を学び、どのような点に困難点を感じていたかを明らかにすることであるため上記の質問項目を設定した。それぞれの回答項目は、事前に留学生5名、日本人学生5名へのパイロット調査で得られた項目及び前年度の授業アンケートの項目から抽出した。

5 結果と考察

本節では、比較日本文化論を履修した学生からのアンケート結果について留学生と日本人学生の回答で類似している点と差が見られた点について記述する。

まず、質問1の「この授業を履修した理由は何ですか」という項目については、留学生と日本人学生の間でそれほど大きな差は見られなかった。留学生、日本人学生双方で高い数値を示したのは、「異なる文化に興味があったから」と「外国人と交流したいから」という項目である。これらの項目に関しては双方ともに過半数の数値となっている。差異として挙げられるものは、語学力とシラバスの項目であろう。「語学力(英語/日本語)の向上のため」では、日本人学生が42%であるのに対して留学生は58%となっている。「シラバスを見ておもしろそうだったから」という項目に関しては、日本人学生が58%であるのに対して、留学生は33%の学生しか選択していない。これらの結果から本授業を履修した留学生と日本人学生はともに異文化交流に興味があったことが窺えるが、その背景にある履修の理由は異なる可能性が考えられる。留学生は小樽商科大学に留学し日々日本語を使う環境に置かれているため、語学力向上の必要性を感じているのではないだろうか。他方、日本人学生は英語を使って生活する環境下にはないため、シラバスを見て単純に、外国人との交流がおもしろそうという理由で履修した可能性が考えられる。まずこの点を授業開始時の動機の違いとして捉える必要がある。

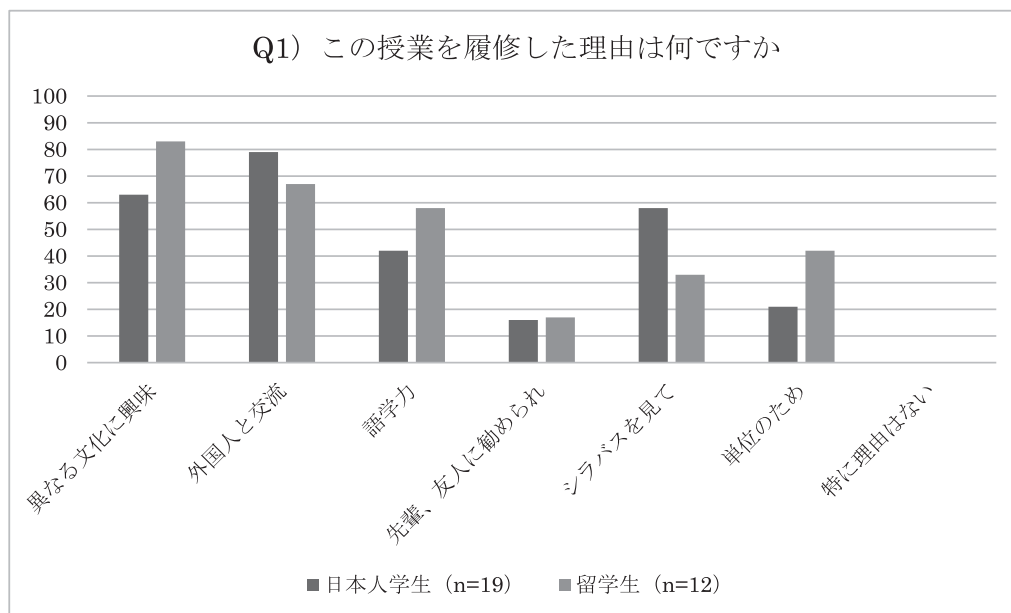


図1 質問項目1の回答結果

次に、質問2の「この授業で得られたことは何ですか」という項目についてだが、留学生と日本人学生ともに「プレゼンテーションスキル」の獲得は高い数値を示している。特に日本人学生は95%と非常に高い数値を示していることから、授業内で設定したプレゼンテーションを作る共同作業という課題は一定の効果を持つことが証明された。留学生と日本人学生の間で大きく異なった点は、「語学力が向上した」という項目である。留学生が75%であるのに対して、日本人学生はわずか21%に留まっている。本授業は、共同作業の過程で必然的に発話が発生するように構築されている。しかしながら授業を観察していると、日本人学生が英語で何かを伝えようとすると、留学生が先回りして英語もしくは日本語で発言を奪ってしまうという場面が多く観察された。このことに関しては、日本人学生5名が当該質問項目の自由記述欄に、「英語で伝えることができずにとっても悔しい思いをした」という趣旨の記述をしていることから推察できる。他方、留学生からは、「日本語を使うしかないので日本語が上手になった」などの自由記述が見られた。皮肉にも日本人学生の英語力がまだ十分ではないために、留学生の日本語の鍛錬の場となったことが窺える。このままでは、双方の学びの均衡が取れないので、次年度以降は、ただ自由に話すだけでなく、語学力の向上も視野に入れた授業設計が必要である教唆が得られた。

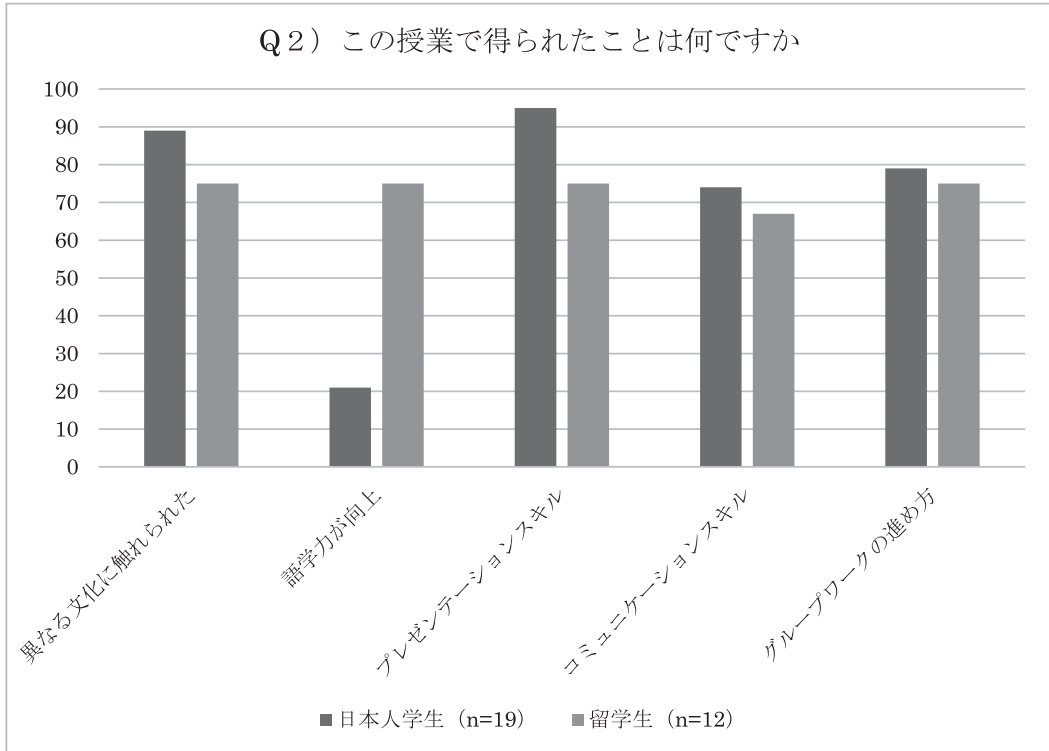


図2 質問項目2の回答結果

最後に、質問3の「この授業の中で難しかったことは何ですか」という項目についてだが、「ことばの壁によるコミュニケーション」の項目において留学生が83%、日本人学生が89%と双方ともに高い数値を示していることが分かる。しかし「グループワークでの自分の役割」の項目では、日本人学生が68%と比較的高い数値を示している一方、留学生は25%とそれほど高くない。これらの結果を踏まえると、日本人学生にとっては英語そのものの難しさが授業内で存在しているため、グループワークに積極的に介入できなかったことが考えられる。他方、留学生はグループワークでの役割においてそれほど困難を感じていないことから、英語もしくは日本語でコミュニケーションが取れない苛立ちを感じていることが推察できる。

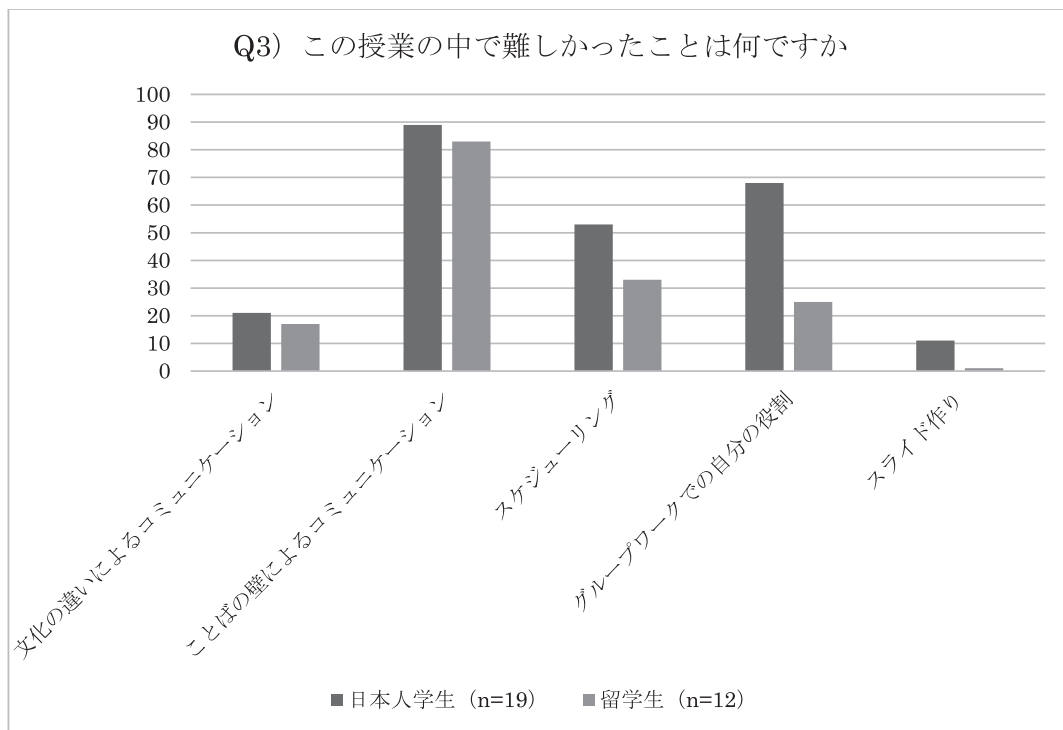


図3 質問項目3の回答結果

質問項目の4番に設定した、授業の利点と欠点に関する自由記述欄からは次の回答が収集できたので、原文をそのまま転記する。なお文頭の+は利点として書かれていた記述、-は欠点として書かれていた記述を意味する。

日本人学生の自由記述

1. +留学生は外国人と思えないほど日本語が上手で驚いた。自分も英語をもっと勉強しなくてはと思った。
2. +こんなことを言ってもいいのかなと考えることが多かったが、多様な意見を聞くのがおもしろかった。
3. +グループワークで進め方や話す順序構造などが違うなと感じた。
4. +日本で当たり前だと思っていたことがそうではないと知ることが出来た。
5. +外国人との共同作業を繰り返すうちに距離が縮まるのがわかった。
6. +ことばが通じないときにどうすれば良いかを考えるヒントをたくさんもらった授業でした。
7. +日常会話なら笑ってごまかすことが出来るが、共同作業となると本当に英語力が必要となるので、英語の勉強の必要性を痛感した。
8. -グループワークで意見をひとつにまとめるのは私たち日本人学生にとってはかなり困難でした。
9. -役割分担のときに留学生とうまく役割を分担できなかった。これやってとお願いすることができなかった。

10. -外国人と接点を持つ機会が乏しいのでこのような授業はありがたい。先生は時々日本語でも話してくれるが、まずは自分の語学力を高めておかないとコミュニケーションが取れないので授業から得るものが少なくなる。
11. -日本人学生の英語力のなさが授業にとってディスアドバンテージになっていたかもしれない。
12. -留学生は日本語を話したがるが、私たちは英語を話したいので、それをどのように使い分けるかが難しかった。

留学生の自由記述

1. +Even if we face language barrier, we still managed to communicate well since we cannot speak each others' language very well but we can understand each others' opinion.
2. +Learning about cultural differences in practice: scheduling, group work, communication
3. +Making friends.
4. +It's easier to make friends with Japanese and other International students when we share classes and have common work.
5. +The advantage was to find friends in groups and learn to understand and communicate each other.
6. +課題がおもしろい。半期ではなく一年やってほしい。
7. +やっぱりことばが通じないときもありますが、それがむしろ異なる文化を感じさせてくれた。
8. +視野が広がる。日本に留学しても日本人学生と交流することはそんなになかったから。
9. -Even though we mostly understand each other but it is not 100%.
10. -The disadvantage was most people barely spoke English.
11. -交流するとき意思を伝わらないことがあります。
12. -時々、日本人学生の日本語がわかりません。
13. -ことばが通じないときに困った。

授業の利点に関する自由記述を概観すると、両者の視点の違いが明確に見えてくる。日本人学生は文化の違いや言語学習の重要性への気づきの記述が多い。欠点においても、英語力のなさや役割分担がうまくできなかったなど、自分の能力への言及が多いことが特徴として挙げられる。すなわち、授業に参加して自分の力が足りないことを痛感している学生が多いことを意味しているのではなからうか。これは、上記の質問項目2の「この授業で得られたことは何ですか」という問いに対して日本人学生の21%しか「語学力が向上した」に回答していないことや質問項目3の「この授業の中で難しかったことは何ですか」の問いに対して、「グループワークでの役割」の項目のみ日本人学生が留学生に対して高い数値を示していることから窺える。本授業に参加してみて、できることとできないことが明確になった結果として、現時点での自身の英語力や異文化適応能力をしっかりと把握できるようになっているということであろう。留学生の利点に関する記述1～8を見ると、ことばの壁はあるが、友人を作れたことやことばが通じないことでむしろ異文化を感じられたとの否定的にもなりうるものを肯定的に捉えている記述が見られる。また、欠点として書かれていたものが興味深い。留学生の記述の9～13が

該当するが、どれもが自分の能力への疑いではないことがわかる。例えば、10や12は顕著で、自分ではなく日本人学生の能力への言及と考えられるものであり、相手への要求の視点が強く見て取れる。

簡単にだが自由記述を整理すると、日本人学生は学問として学んできた英語を使って共同作業を行った結果、自分の英語が通じないことや異なる考え方に触れて自分の能力向上に目覚めるといった流れで授業に取り組んでいたことがわかる。それに対して留学生は日本に留学しているにも関わらず日本人との接触機会の少なさが存在していたと考えられるため、本授業のような混在クラスで友人ができたことに価値を見いだしている。また、ことばが通じないことをそれほど気にしていない様子も窺えた。

6 結び

本稿は小樽商科大学で2017年に開講された留学生と日本人学生の混在クラスである比較日本文化論の授業において、履修学生が何を学び、どのような点について困難を感じていたかを明らかにすることを狙いとしている。学生に回答してもらったアンケートの結果を見る限り、留学生と日本人学生は、ともに異なる文化を持つ外国人との交流に興味を持ち、授業の履修を決めていたことがわかった。

授業での学びについては、共同作業として設定した2回のプレゼンテーションからの学びが高かった。本授業は日本人学生1年生の履修が多かったため、初年度教育としての位置づけとして捉えられた可能性が高い。

授業内での困難を感じたことについては、留学生と日本人学生双方が「ことばの壁」に高い数値を示していたが、自由記述も考慮して総合的に検証すると、留学生はことばが通じないことそのものへの困難もしくは不満を感じているのに対して、日本人学生は、英語が話せない自分への引け目を感じていることが見えてきた。この傾向は決して否定的に捉える必要はない。日本人学生が自分自身の能力を的確に把握する場を得たと考えれば、本授業履修後の英語学習にもより一層真剣度が増すからである。

最後に次年度以降の比較日本文化論に求められる改善点を整理する。第一は英語と日本語の使用頻度の検討である。今までは、英語と日本語を併用していたが、今後は、時間を区切るか、回ごとで使用言語を変えるなどの対応を取りたい。これにより日本人学生が感じていた、自分は英語ができないという強過ぎる思い込みの払拭と留学生の日本語を使ってコミュニケーションを取る場の提供が可能となる。第二は言語的な支援の強化である。自由に話すだけでなく、定型文を事前に英語と日本語で渡しておくなどの対応を取ることで、伝えたい内容はあるが言語的な制約で伝えられないという問題が回避でき、さらには言語運用の練習ともなる。第三は、交流の場としての授業の位置づけの再検討である。本授業は留学生と日本人学生の交流の場の提供という傾向が強いことがわかった。もちろん、この意義は大きいですが、大学の講義・演習として位置づけられている以上、内容を深めつつ交流の場となることが望ましい。この点は今後の最大の課題として挙げたい。

本稿は、学生へのアンケート調査を元に授業改善へと繋げることを目的とした。無論、アンケート調査の限界もあることは事実であるし、縦断的な調査の必要性も否めないが、留学生と日本人学生の混在クラスで何が起きているかの記録としては一定の意味を持つ。本稿が今後、留学生と日本人学生の混在クラスを運営する教師の一助となれば幸いである。

【参考文献】

- 岩崎千晶・池田佳子（2015）「グローバル人材の育成を見据えた日本人学生と外国人留学生の混在型による初年次交流学習のデザイン」『関西大学高等教育研究』第6巻, pp87-93.
- 岡田彩・中村伊都子（2016）「日本人学生と外国人留学生による「学び合い」の促進－同志社大学政策学部と京都アメリカ大学コンソーシアム（KCJS）の協働から」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』第7号, pp89-102.
- 島崎薫（2018）「地域住民と国際共修で留学生は何を学んだのか」『東北大学 高度教養教育・学生支援機構 紀要』第4号, pp397-406.
- 田崎敦子（2002）「英語を共通言語とした大学院における異文化間コミュニケーションクラスの試み－タスク活動における教師の役割」『異文化間教育』第16号, pp140-150.
- 花見楨子（2012）「ブレインストーミング『英語で授業する/しない』」『二重大学国際交流センター紀要』第7号, pp97-107.
- 北海道大学留学生センター（2014）「[特集] 留学生と日本人学生がともに日本語で学ぶ「多文化交流科目」の創設」『北海道大学留学生センター紀要』第18号, pp.1-17.
- 宮本美能（2013）「バイリンガル学生が果たす役割－留学生と日本人学生の混合クラスにおける一考察－」『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第17号, pp65-71.
- 徳井厚子（1998）「「多文化クラス」の集団発達過程－事例－大学・地域との接触から-」『教育システム研究開発センター紀要』第4号, pp77-93.